

自己を高める評価力の育成に着目した生活科授業

— 単元「おいもさんができたよ」の実践から —

上之園 強

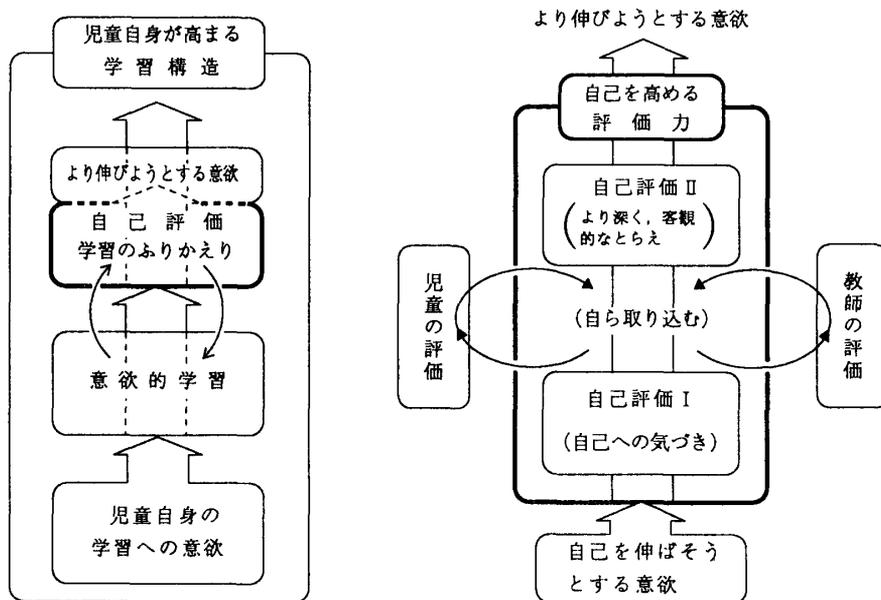
1. 自己を高める評価力の育成にあたって

(1) 自己を高める評価力とは

児童はどの児童も、「それぞれに意欲を持ち、伸びようとする存在である」という考え方にたつて、自己を高める評価力を次のようにとらえている。

「自分自身の学習状況を冷静にとらえ、誤りや不備を修正したりよさを認めてよりよく伸ばしていこうとする力」

この自己を高める評価力は、一人よがりの評価ではなく、他者からの評価、つまり教師や友人からの評価も取り込んで、最終的には自分自身をよりよく伸ばしていく力である。従って、この評価力は自分自身を伸ばそうとする意欲と切り離すことのできない力であるといえる。そして、この力の根底をなすものは、自分自身への気づきであると考えている。このとらえ方を図示すると以下の通りである。



(2) 自己を高める評価力を育成する視点

ア 授業構成の視点

自己評価力を育成していくためには、児童が自ら自分自身を評価していける場面を学習の中に設定し、その繰り返しの中で育てていくことが大切であると考えている。しかし、ただ単に評価場面を設定しても、その前提としての学習が、児童にとって意欲的でしかも自分自身を評価できうるだけの学習に構成されていないと、自己評価することに無理がでてくる。したがって、自己評価力を育成していくためには、「児童が自己評価するに足る意欲的で確かな学習であるか」と言う視点から学習内容の構成や学習過程の工夫をおこなわなければならない。また、どの場面に自己評価を位置づけるのかも考えておく必要がある。

イ 評価の視点

設定された自己評価場面で、どのような方法を用いれば児童自身が評価しやすくなるか。その評価方法を検討しておく必要がある。また、児童の自己評価を引き出すための教師の評価（ことばかけ）や児童相互の評価、あるいは児童自身が自己評価したことへの教師の評価（励まし、学習への位置づけ）などを事前に検討しておく必要がある。

2. 授業の実際 複式低学年単元「おもさんができたよ」

本実践は、前記アの授業構成の視点に重点をおき、生活科という体験や活動を主体とした学習の中で、児童の活動の流れを切らないで自己評価力の育成をめざした試みである。

(1) 単元について

本単元は、児童が自分自身でサツマイモを育て、収穫する活動を通して、植物に親しみをもち、植物を大切にしていこうとする態度を育てていくことを意図したものである。自分達の手で植えたサツマイモを収穫する時に、児童はその成長ぶりに驚き、感動することと思われる。このような体験を通して、動植物が自分達と同じように生命を持ち、成長していることを具体的にとらえさせていきたいと考えている。

児童は、6月にサツマイモを植えた段階で、自分の苗が大きく成長してほしいという願いを持っている。そのため、収穫にあたってはサツマイモがどのくらい大きくなっているかという関心や期待を抱いている。このように自分達と関わりの深いサツマイモを収穫することによって、植物に対する愛情や大切にしたい気持ちを育てていけると考えている。

(2) 自己を高める評価力を育成する工夫点

本実践は、自分達が植えたサツマイモを収穫し、そのサツマイモの使い方を考える学習である。このような活動を通して、植物に親しみをもち、植物を大切にしていこうとする態度を育てていくことを意図している。

このような収穫活動において、「自己を高める評価力の育成」の視点から特に授業づくりで工夫したことは、次の点である。

児童の活動の流れを切らないようにして、一人一人の児童とサツマイモとの関わりや収穫した時の喜び、感動を児童自身に「意識化」させること。

具体的には児童の活動の流れの中で、次の活動をうながす指示やその場面での気持ちを問いかける発問をおこなって意識化を図っていく。児童は、無意識のうちに収穫したり、つぶやいたりしながら収穫しているが、その言動を「意識化」させていくことによって、サツマイモとのかかわりや思いの深まりに改めて気付いていくと思われる。この気づきが自己を見つめる力（評価する力）につながり、ひいては自分自身で生活をつくっていく力に発展していくと考えている。学習活動案での◎印は、このような考えに基づいて意識化を図る場面を設定したものである。

学習のねらい

1. サツマイモを収穫する活動を通して、植物に親しみをもち大切にしようすることができる。
2. サツマイモの食べ方やサツマイモの遊び方を工夫することができる。
3. 友達と協力して、サツマイモを収穫することができる。

活動内容と計画

第一次	サツマイモをほろう	3時間（本時 第2時）
第二次	サツマイモをたべよう	2時間
第三次	サツマイモであそぼう	2時間

本時のねらい

サツマイモを収穫した喜びを味わい、大切にしていこうとする気持ちを持つことができる。

評価の観点

関心・意欲・態度	自分達が育て、収穫したサツマイモに対してどのような気持ちを持つか。
思考・判断	収穫したサツマイモに対して、どのようにはたらきかけようとしているか。
環境や自分への気付き	収穫したサツマイモと自分との関わりに対して、どのような気付きをしているか。

学習過程

学 習 活 動	教 育 的 価 値	援 助 ・ 指 導 上 の 留 意 点
1 サツマイモをほる用意をする。 ・道具の準備 ・ほるときの約束	○これから、掘ろうとするサツマイモに自分なりの思いを持つことができる。 ○収穫するための道具を準備できる。	1 ◎土の中のいもに声をかける場を設定し、自分達が植えたいもにたいする思いを引き出していく。
2 サツマイモをほる。	○自然の恵みや収穫する喜びを感じることができる。	2 ほったいもに自分なりのことばで、話しかけるように指示する。 ◎ほる際のつぶやきや話しかける言葉、様子などからいもへの気持ちを見取っていく。
3 収穫したサツマイモをどうしたいか考える。	○収穫したサツマイモの食べ方やつかいかたなどについて、工夫をすることができる。	3 ◎児童がかかわってきたサツマイモであることを意識させていくために、収穫したいもの山をみつめながら、植えた時の様子を想起させる場を設定する。 多様な考え方を引き出していくためにこれまでの先行経験を参考にさせる。
4 片付け方を考える。	○道具の片付けや畑をきれいにすることができる。	4 自分達が次に来た時に、気持ちのよい畑になるように呼びかける。
5 収穫したサツマイモを教室に運ぶ。	○互いに協力していもを運ぶことができる。	5 2年生のリーダーを中心に話をさせる。

(3) 活動の実際

さつまいもを掘りにいく準備をする場

当日は雨であったため、児童に「さつまいもをほりにいくか、とりやめるか」問いかけてみたところ、全員が掘りに行きたいといったため、雨の中でどのようにしていもほりをするか、はなしあうことにした。その結果、水泳の際に使用したサンダルを使う。傘は、いもをほるときにじゃまになるため、カップを使うことになった。しかし、ほとんどの児童がカップを持ってきていなかった

ため、教室においてあったゴミのビニール袋を使用してカップをつくることになった。児童は意欲的にカップを作り、さつまいもをほるための準備をすすめていった。

サツマイモを掘る場

①「今からいもさんを掘るんだけど、土の中のいもさんに聞こえるように声をかけてあげよう。」

- ・今から食べてやるぞ
- ・やきいもにするからね
- ・掘るから待っててね

(はやく掘りたそうな様子である)

②「では、ほろう。掘って出てきたいいもさんに声をかけてあげよう」

(それぞれに掘り始める。葉を除けて一生懸命に掘り続ける子。友達の掘るのを見て、それから掘り始める子、掘ったいもをもらっている子。虫に熱中している子など、それぞれの姿が見られた)

- ・でっかいな。・こんなにおおきいのがとれたよ
- ・(つるをひっぱってきれる。)
- ・なんにもでてこん。
- ・おお、いも、やっとみつけた。・くろうするの。
- ・先生、ぼくでっかいのみつけたよ。・ぼく、ちっちゃいのばかり。
- ・兜虫の幼虫じゃ、モスラじゃ、いものすぐ近くにおったんか。
- ・カマキリがおる。・でた、次はここじゃ。

(児童は掘ることに熱中し、いもに声をかける児童はわずかであった。)

③「掘ったいもさんに、なんと声をかけたの。」

- ・こんにちは。元気で育っているね。
- ・こんなに、よく大きくなったね。
- ・いもにして、食べてあげるからね。
- ・お腹の中で、友だちになれるね。

④「いもを植えるときは、どう思っていたの。」

- ・おいしい、大きないもさんになってね。
- ・おおきくなったら食べるぞ

掘ったサツマイモをどうするか考える場

①「みんなが掘ったいもをこれからどうしようか。」

- ・あらって、生で食べる。・焼いて食べる。・みんなで分けて食べる。
- ・給食室にもって行って、給食にだしてもらおう。・家にもってかえる。
- ・いもパーティをみんなで開きたい。かざりや遊ぶものをつくりたい。



②「つるはどうしようか。」

・もやす。・もやしてやきいもにする。

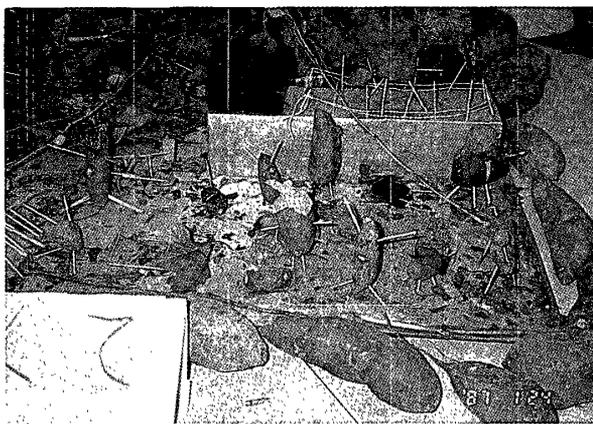
(児童は、食べることに目がむいており、自分達の大切ないもという意識でどうするかがやや弱い。)

③いもをどうするか。一番いい食べ方や、遊びかたを考えていこうと呼びかけて、いもばたけでの学習をおえて、収穫したさつまいもを教室へ運んだ。

(4) その後の主な活動

①さつまいもを活用してあきのふくていランドをつくる。

児童がさつまいもを活用して、飾りや遊ぶものをつくりたいという希望をもっていたため、話し合いを行い「動物や自分達と一緒にあそんでいるあきのふくていランド」をつくることにした。児童はさつまいもやつる、枯木、空き箱などを活用して意欲的に作成していた。



②複式低、中、高学年の合同の収穫祭をおこなう。

児童はさつまいもを食べたいという希望を強く持っていたが、その食べ方についてはよく知っていなかった。そこで、複式学級の特性を生かして、高学年の5、6年生に食べ方を教えてもらい、そのお礼にいもと一緒に食べるイモパーティを開くことにした。



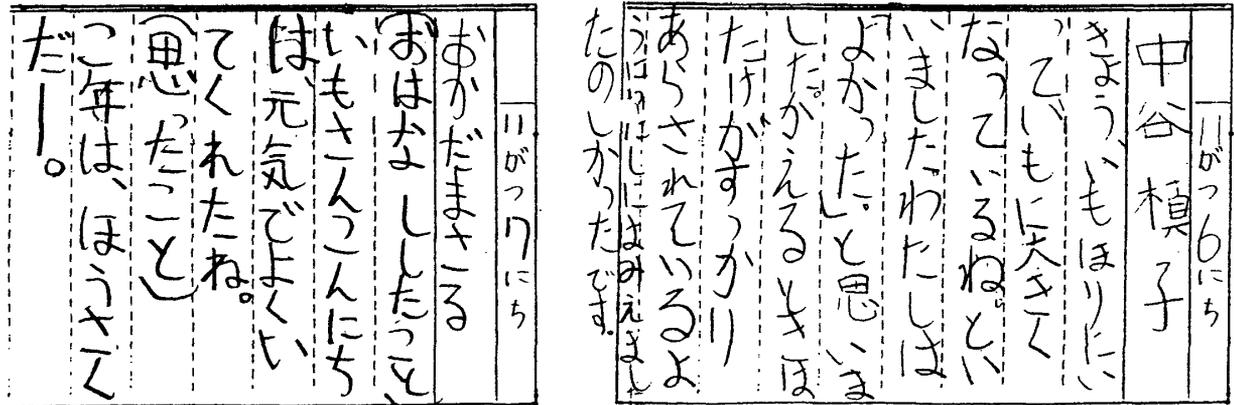
3. 指導後の考察

本実践では、児童自身とサツマイモとの関わりや収穫した時の喜び、感動を「意識化」させる場面を設定し、「自己を高める評価力の育成」を図ったがこの点について、授業の観察者9名による感想と児童のはっけんカードをもとに考察してみたい。

○ いもと自分との関わりを繰り返し意識化させることは、自己を高める評価力の育成という視点から有効であると思われる。低学年という発達段階を考えたとき、自分の言葉で相手(いも)に呼

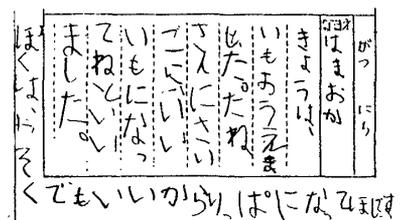
びかける、相手に働きかける（いもを掘る等）五感を使った活動を学習の中に織り込み意識化を図っていくことは、一人一人が学習を振り返り、新たなめあてを設定し自ら活動していくことにつながっていくと考えられる。このことは、授業後の児童の感想にさつまいもを擬人化して、呼びかけるなどの記述が多くみられたことからもうかがえる。児童は自分といもとの関わりを意識し、収穫できたことの喜びを自分なりに感じている。このことが自分自身で植物を大切に育てていこうとする次への活動につながっていくと思われる。

いも掘りをしたあとの感想



○ いもと自分との関わりは、「まず、掘りたいも自分が植えたいもであったかどうか」ということが問題になってくる。本時では、自由に掘らせていたために自分が植えた稲がどの様に大きく育ち、どのようないもになっているかという認識、自分が植えたいもという認識が児童に不十分であった。今後は、自分が植えた苗と成長してできたいもとを結びつける活動（植える際に自分のいもにカードをつけ願いを記入させる。例・「お願いラベル」川崎氏実践初等教育54号参照。畑を区切り自分のいもを明確にしておくなど）を取り入れていけば、より確かなものになっていくと考えられる。

いもを植えたときの感想



○ いもを植える時点で、なぜいもを植えるのか、できたいもをどうするかという意識化も必要である。「いもを育てて食べたい」という児童の願い、先への見通しが主体的な活動意欲につながる。本時では、「いもを家に持ち帰りたい」という発言が多かった。2年生の児童は昨年いもを持ち帰っていることや学校で調理する方法がわからない、など理由は考えられるが、導入における意識化をしっかりと児童にさせる必要があった。

○ 授業をした日は、雨模様だったため、「いも掘りをどうするか」話し合ったところビニルぶくろでカッパを作り、おこなうことになった。また、前日、いも掘りに必要だと考えられる物（袋、シャベル、手袋、ビーチサンダルなど）は各自で自由に準備させた。このことは、主体的に活動するための手だてとして有効であった。

参考文献「個が生きる授業の評価」広島大学附属東雲小学校 1992年

「自己評価」安彦忠彦 図書文化社